
流れ星

蒼幻α

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ星

【Nコード】

N9919K

【作者名】

蒼幻α

【あらすじ】

病床にある妻を看病する小説家の夫の話。
ちよっと暗めの物語です。

燃立つカンナの葉がちらちらと目に映る。感傷的なけばだった心に、その刺戟はいたく沁みていくようだ。軽いおののきを覚えながら、彼は湿っぽい大気のなかを泳いで渡るような心地をもって進んでいく。前途に希望を失った耶蘇教徒のように、ただ日々の経過に老いの感覚を実感するだけの人生。美しく生きることが罷めてしまった人間は無惨なものだ。すべてを放擲したという意味ではない。ただ、にじり寄ってくる不幸にどう対処すればいいのか、考えれば考えるほど、彼を戸惑わせるのである。

正午過ぎの通り雨の余韻が、いまでも薄っすらと残っている。民家の庭木に掛かっている蜘蛛の巣には細かな雨滴がついており、夕方の肌寒さのなかで淋しく光っている。それは心細さを助長するものであるかもしれない。それでもなお、生命の尊さを象徴しているようにも思われて、彼は勇気を鼓舞されたような得難い感覚に陥る。夕陽を背にしての帰宅だったが、彼は散歩に出ていたのである。

西の河原まで歩き、そこでしばらく時間を潰して、同じ道を引き返す。それは彼の日課であった。物書きという、内職にも似たような仕事を終え、散歩をすることが彼のひとつの習慣になっていた。家にいながら仕事ができるという環境は、病床の妻の看病にも最適であった。妻はいま眠っているだろうか、それとも起きているだろうか、何を考え、何を話そうとしてくれるだろうか、そんなことを思い、妻が不治の病であることに打ちのめされそうになった過去を思い返し、そして、病にあらがって調子をよくしている最近の妻の状態で心を慰撫されながら、彼は通りから見える風物に目を遣って気分をなごませる。

狭い道に停まっている乗用車のフロントガラスに夕陽が撥ねかえって煌いている。光線には十分な赤みがあり、それは子供の頃、よく祖母に言って頒けて貰った鬼灯のあの赤みに似ていることを思う。

あの真つ赤な色合いには郷愁を喚起する力があるようで、特に秋の夕はその情景が幾層倍にも増すように思える。

遠くでジェット機の飛ぶ音が聞こえ、どこだと探すと、北の空に白く飛行機雲を曳いて一直線に飛んでいるそれを見つける。それが済むと、鴉が乾いた声で鳴きながら、巢に帰る様子が見受けられる。救急車の音が聞えて来る。そんな音に耳を澄ませていると、ある民家の軒先から子供の声が聞こえてくる。

「お父ちゃん、もっと！ もっと！」

声のした方に目を向けてみると、低い庭木の向こうに五歳くらいの子供を肩車した父親の姿があり、父親はくるくる回ったり、とび跳ねたりして子供を喜ばせている。

「あはは、もっと、もっと！」子供はせがむ。その顔には、満面の笑みがしっかりと刻まれている。親子のふれあいとでもいうのだろうか、そこに澄んだ女の声加わる。

「はしゃぎ過ぎて、落とさないようにね」妻なのであろう。その声には張りがあり、また健康的な響きがあった。彼はなにか得難いものを得たような気持ちになったが、それが何に起因するものであるのか、まったくわからなかった。ただ幸せそうな家族の姿をそこに見て、憧憬の気持ちを胸に抱いたのである。

彼はなおも進んでいき、三叉路を右に折れる。

遠くの空がまるで東雲のように朱に色づいているのをみて、これからまた太陽が昇りなおすのではないかという着想を持つ。それは心が弱っている証拠なのだろうか。なにか得体のしれない、とてつもない大法則によって、太陽が逆方向に運行してもおかしいことはなにもないというような、鮮鋭な気分を得る。彼はそれをあからさまに否定するようなことはしない。むしろ、そういうことが起こってもいいじゃないかという宥和の気持ちさえ覚える。いや、そう信じてみたかったというのもあるかもしれない。

なにか常識では考えられないようなことが起こればよいのに、と希^{ねが}う心がそのときの彼にはあった。そうすれば、にっちもさっちも

いかないう現状を打破できるだけの情熱が得られるのに、と心を定めていたのである。

国鉄の線路に近いこともあって、湿っぽい大気を渡って、踏切が鳴りだした。やがて、轟音とまではいかないにせよ、線路に車輪のあたる音がして、枕木が緩んでいるのか、時折、酷い音をさせながら、電車は通過して行った。やがて踏切の音も熄^やんでしまう。

彼は今度は十字路を左に折れ、また東に向かって歩いて行く。その辺りは民家がぼつぼつとしかなく、代わりにあるのは、見事な田園風景であった。田圃は刈り入れの時期をすぎ、もう一本たりとも稲は残っていない。地面の黄色は機械が入って、稲の茎を細かく砕いて撒き捨てた跡である。落穂まで綺麗に取り除かれたそれらには、餌を当てにしてやってくる雀の群れもない。折しも夕暮れ時、昼間の雨の匂いとそこの稲の葉の絨毯から立ちのぼる香気が入り混じって、なにか咽るような、込みあげるような臭いが作られている。彼はそれを吸いこんで、自分では農業を全くやっていないにもかかわらず、田舎の良さを実感するのだった。

やがて陽が沈みこみ、夕暮れは暗闇へと変わっていく。田舎のこととして、街灯などという洒落たものはない。日が沈めば、この辺りは真っ暗になる。彼は完全に日が暮れてしまう前に家にたどりつく。そして、今宵の月はたしか満月だったなと思い、あと少しすれば東から昇るであろう月の姿を想像して頬を緩めると、玄関扉を開け、中にいるはずの妻に「ただいま」と告げて靴を脱ぐのだった。

一（後書き）

感想意見等お待ちいたしております。
よろしくお願いいたします。

二

病床にあるはずの妻の部屋から、ぼつりぼつりと話し声がする。

玄関では聞えなかったが、妻の部屋に向かうと、その声は顕著である。誰か来ているのかな、と気になったが、妻の部屋の障子戸をあける間にそれと悟った。ラジオの声だ。妻の部屋には、病に臥せてからというもの、必要最小限のものしか置いていなかった。ラジオもずっと置かないようにしていたが、台所から持ってきたのだろう、妻が病床を出て、そこまで取りに出たことを回復の兆しと見て、彼は嬉しくなった。

「ただいま」障子戸を開けて、妻に挨拶する。

妻は身を横たえていたが、布団ですっぽりと身体を隠す風ではなく、上半身に布団が掛からないようにめくり上げていた。

「布団、掛けなくて寒くないか？」

「大丈夫ですよ」妻はやや細ったような声でそう告げ、くすつと笑う。その笑みだけ見ていると、病床にあるなどとは到底思えない。

「なにか、面白い事がありましたか」そう言いながら、妻はラジオのスイッチを押して電源を切った。

「もういいのか？」と彼は訊ねる。

「ええ、気晴らしですもの。あなたの話の方が聞きたいわ」

「帰り道にね——子供を肩車している父親を見たんだよ」

「まあ」妻は目を丸くした。

「名前も知らないお宅だけど、夫婦仲もよさそうで、とても気持ちの良い光景だった」

「それはようございました」妻はほほと口に手を当てて微笑んだ。そして「でも——」と付言する。

「どうした？」と彼。

「私たちには到頭、子供が授かりませんでしたね」

「そんなことは気にしないがいいよ」

「でも、子供がいれば、貴方も気分が晴れたでしょうに」

「ないものをねだっても仕方ないさ」

彼は力なくほほ笑んで、気にしていないことをアピールしようとしたが、それは無駄であった。妻は夫の本心を見透かしているというような賢妻ぶりは見せなかったが、沈黙のうちにありながら、何か思いつめたような表情をしているのを見た彼は、妻が何もかも理解してしまっていると思わないわけにはいかなかった。

「それとね――」彼は気づまりな雰囲気を変えようと、別の話題に移った。「今日は夕陽が真っ赤で、ふと、昔のことを思い出したんだ」

「まあ」妻は声を上げて、夫の言葉を喜んだ。

「この家でのことだけど、祖母が大切に育てていた鬼灯を貰って、あの丸い実の中身をほじくり出して鬼灯笛を作ったことを思い出したんだ。今でもあの音が耳に残っていて、それでまた郷愁が喚起されたような思いがしてね」

「そういう思い出は、作品にもいい影響を与えてくれるかもしれないませんわね」

妻は夫の仕事のことを引き合いに出した。最近の夫の筆業の、なかなか本心から創りたいと思っているものを創れないもどかしさを知っているだけに、何か現実の世界で示唆される感覚や思いという物を題材にして、彼自身の力の発揮できるものが創られないかということを思いつづけているのであった。妻は夫の仕事に全幅の信頼を置いていた。自分の身がこんな風になんの役にも立たぬ、ある意味、負担を掛け続けている現状を苦に思い、どうにか夫にだけは満足のいく仕事をしてもらいたいと切望しているのもあった。

妻は考え込んでるように、彼には見えた。

「本当にごめんなさいね」

やがて妻はそう言うのと、座り込んでいる夫の手に、自分の手を伸ばして重ねた。

「私さえしっかりしていれば……」

「なに、心配はいらないよ」彼は明るくふるまう。

妻の様子に、自身を苛むような色が見えたので、彼は励まそうとした。心配はいらない。自分がうまくやる。そう思いながら。

「それじゃ、夕餉の準備をしてくるから、しばらくゆっくりしてる
といいよ」

彼は腰を上げ、妻と自分の食事を作るために台所へ向かった。

三

身体を起こしている妻の髪は生来の黒髪だったが、肩甲骨に届くほど長く、また一日の大半を寝て過ごしていたこともあり、少し乱れていた。それが彼女には我慢のならないことらしく、食事を摂るちょっと前に身体を起こして、お気に入りのお甲の櫛で髪を梳いていた。それでもまだ少し乱れている妻の髪は、持主から離脱した異端分子のようである。

「ゆっくり食べるんだよ」

彼はそう言うと、妻に粥の鉢を渡した。

一口食べてみて、妻は瞳を輝かせて告げる。

「うん、美味しいわ」

「たくさんあるから、ゆっくり食べるんだ」彼はにと口辺を緩める。

妻は食べることに集中する。

やがて妻は粥を口に入れるのに飽きたのか、しばらく蓮華を置いて、口を開く。「何か自分が押し込められてこれ以上、どこへ行くことができないような、そんな閉塞感がありますわ」

「そう思うのは、自分を見失っている証拠かもしれないね」彼は辛辣に言った。

「見失ってる？」

「ああ」と彼。

「それはまたどうして？」

「だってそうだろう。自分はこの世に属していないなんて思っている、生きている以上、何者かではあるわけだよ。たとえば、自分の世界がこのたかだか数畳の部屋の中にしかないとしても、世界は自分を見捨てたりしない。そういうことを思うのは、自分の身を本質から遠ざけてしまっているということに他ならないんじゃないか？」

「そういう考えですか……」妻はそれ以上の言葉を失った様子であ

る。

「さあ、もっと食べなさい」彼は促す。

妻は観念したように、鉢のなかの粥を少しずつ減らしていった。やがて妻は粥を平らげ、微笑みながら夫に告げた。「美味しかったですわ」

「もういいのかい？」

「ええ」

彼は鉢を片しに腰を上げた。

「私も食事をしてくるよ」彼はそう妻に告げ、台所へ向かう。

彼はそのとき、ひとつの着想を得ていた。妻の世話をしていると、きにもいつもおぼろげに感じていたことだったが、今日は一層、その感覚が鋭敏になっており、ひとつの物語が思い浮かぶところまで気分が嵩じていたのだった。それはひとりの、妻に捨てられた男の物語であった。物悲しさの漂う冒頭シーンに較べ、未来に希望を見いだすラストシーンは、彼が妻をいずれ亡くすだろうという予感に裏打ちされたものとして、病理学的にも参考にできそうなほど、その感覚は素直で、澄明で、また真摯でありながら、まったくき不道徳とも言えるようなものであった。

まだ妻が亡くなると決まったわけではない。彼は一縷の希望をつないでいた。もしかすると、妻の病はすべてがまぼろしで、ある日には、すべてが朝露のように蒸発して、跡形なく消えてしまうのではないか？ そんな風にも思えるのである。しかし、現実問題として、一人残されたあとの生活というものに、何を張りあいにして生きて行けばいいのだろうかとの思いも助長される。

そんな思いに駆られながら、彼は夕食を済ませ、妻を風呂にいれる準備をする。

浴槽に湯を張り、適温であることを確かめて、妻を床から出す。

いつもしていることとは言え、やはり妻の裸をみる唯一の機会となっていてこの一時を、夫である彼は甘美な時間として受け入れると同時に、また、やるせない思いも同時に抱くのである。妻の身体

を洗うとき、妻は一言もしゃべらずにされるがままになっている。両の乳房を綺麗に洗うとき、すべすべした肩甲骨の辺りをこするとき、黒いしげみの股の間に手を入れるとき、彼はこの妻の身体が自分の自由にならぬというもどかしさと戦うと同時に、エロティシズムを素直な形で享受できない悶々とした気持ちに突き動かされて、ときどき、その身体を傷つけてみたくなる。もちろん、傷ひとつない妻の身体は尊いものとして受け入れる気持ちがある。しかし、完璧なものを穢してみたいという思いは、彼のなかで大きな衝動となって存在しているのである。彼は、ああ、と嘆く。

「どうなさいました？」妻は不審がつて訊ねてくる。

「なんでもない」と彼は自分の心を押しこめる。

「そう……」妻は何事か感じているように見えて、その割に何もいわない。また沈黙のときが流れる。

石鹸の泡を流して、妻を湯船に入れる。長時間は駄目だと掛りつけの医師から念を押されているため、疲れがとれるぎりぎりの時間を見計らって、妻を湯船から出す。

「いつも悪いですね」妻は着替えをさせているときにそう述べた。

「気にしないがいいよ」と彼は答える。

そうして、週に二度きりの入浴を終えさせると、妻を床に返し、今度は彼が湯につかる番だった。

四

風呂からあがり、気晴らしに妻の部屋へ向かうと、彼女は身体を起こして提案した。

「ねえ、ちよっと外に出てもいいかしら？」妻の言葉は唐突だった。まったくこれまで意識していなかったことだけれど、この時間帯に彼女が外へ出てみたいというのは、このところまったくなかったことである。

「身体を冷やすと毒だよ」と彼は断った。

「でも、今日は空気が澄んでいて、空も綺麗に見透かすことができるだろうし、関心があるの」

「なにか、狙いがあるのか？」

と彼が問うと、妻は、やっぱりわかるのね、と口元を緩めた。

「ラジオを聴いているときに、アナウンサーの方が言われてたのよ。今日は、全国的に流星が見られそうです、ってね」

「流星……」

「ええ、夏の流星群は有名ですけど、秋の流星群が話題になるのって珍しいでしょう。ジャコビニ流星群とか言うらしくて……、一度見てみたいと思ったのよ」

彼はそう言うのを見るのも悪い気はしないと思い、一枚上に羽織るものを着させてから、妻を車いすに乗せて外へ連れ出すことに決めた。

外の空気は澄んでいて綺麗だった。夕方嗅いだ雨後の大気と稲から立ちのぼる香気は緩められていた。そして、南の空に掛かりはじめている満月を見て、明かりなしでも十分明るいことに気づく。

「満月ですわね」と妻がうめくように言う。「これだけ明るい、流星が見えないんじゃないかしら……」

「いや、そういうのもいいんじゃないかな？」と夫である彼は言う。「あ」空を見上げていた妻が声をあげた。それは洩らそうとして洩

らしたのでない、何かあつけにとられたような、不意打ちをくらってあげたような、そんな声だった。

彼も空を見上げる。妻は夫よりも先に流星を見られたことに喜びを覚えているようだ。いったい、この夜はいくつの流星を見ただろう。

静謐な暗黒空間の中を^{すべ}に飛んでいく流星たち。命の形跡などないのに、まるで生きているかのように思えて来る。まっすぐに箒を揺曳するその姿は、未来に対する願いというものを感じさせるほどに、高貴な印象を漂わせる。世界は改めてつくられるというような印象を受ける。それは妻の容態を慮って未来への希望を失い、散歩の帰路に就いていた彼自身を、励ますような形で作用するのだった。河原での一時、ここで激流に身を投げれば、すべての苦悩は解消され、天へと昇って行けるんじゃないか？ そんな弱った思いが胸に萌した彼だった。しかしそんな彼には、いまではその着想を愚かなことだと思いなおすだけの精神的余裕が生まれていた。車椅子の上で妻が身を震わせる。

「冷えて来たね、そろそろ中に入ろうか？」

「そうですわね」

彼はみずみずしい大気をこれ以上吸いきれないというくらいいっぱい吸い込んでから、ゆっくりと吐きだした。妻は感動している様子だった。もしかすると、願いのうちのいくつかは、完全に姿を消してしまうまでに言い終えられたのかもしれない。しかし、妻の性格では、自分のことを祈ったりはしなかっただろう。

「何か、願い事でもしたの？」と彼は訊ねる。

「ええ、ちよっとね」と妻ははぐらかす。

「気になるね」

「ほほ……」妻は口に手をあてがう。「秘密にしておかないと、願い事は叶いせんからね」

「それもそうだ」彼は素直に納得する。

妻が何を願ったのか、それは後日、明らかになった。

筆業は中堅どころが得ることのできる伝統と権威ある文学賞を受賞したのだ。

その報せを聞いて、衰弱の度の激しかった妻が、彼に告げた。

「あの日の、流星への願いは、このことでしたの」と。

常に夫の筆業に対して、願いを持っていた妻のこと。文学をやることが彼の生甲斐ではあったが、妻の生甲斐もまた夫のその筆業にあったのだと、彼は気づかされた。

授賞式に向かい、帰って来た時、妻は帰らぬ人となっていた。

それは願いが叶ったことに対する応報であったのかもしれない、と彼には思えるのだった。

四（後書き）

完結しました。

やっぱり暗かったですよね？（汗）

感想、お待ちいたしております。

オリジナルURLはこちらです。

http://sengen01.web.fc2.com/
nov09b/nov11300.html

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9919k/>

流れ星

2010年10月8日15時07分発行